

所 陵

No.11

関西大学考古学等資料室彙報

昭和60年 5 月31日発行



弥生土器（兵庫県加茂遺跡出土）

目 次

湖南史学入門－日本史の立場から－……………	2
五世紀研究の一視点－畿内と日向と吉備と－……………	4
木村健助先生とエジプト……………	6
内藤湖南と内藤伯健の書－内藤文庫特別展観から－……………	8
50年ぶりの恭仁山荘……………	10
内藤湖南と「恭仁山荘」……………	12
資料紹介「漢代の明器」……………	14
資料室ニュース……………	16

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06—388—1121)

湖南史学入門—日本史の立場から—

横 田 健 —

内藤湖南先生のなくなられたのは、昭和9年6月26日である。私は昭和9年4月に旧制第三高等学校文科に入学して、日本史を中村直勝教授、地理を藤田元春教授にならっていた。両教授が、湖南先生の没した直後に講義中、その偉さを話された。

中村先生は、「湖南は大蔵書家で、17万部の本を持っている。17万冊ではない。部とは、漢籍は帙の中に何冊も入っているから、冊数にすれば、もっと多いのだ。湖南は、しかも書庫のどこに、どの本があるか、全部記憶していた」と強調せられた。このたび関西大学の架蔵に帰した内藤文庫は約3万冊というから、中村先生の言われた17万部は、間違っていたのであろうか。むろん、このたび寄贈された内藤文庫は、湖南から伯健に伝わった文庫で、湖南の子息には他に戊申氏のような東洋史家も居られ、その方の蔵書は別にあるはずである。女婿に鴛渕一氏のような東洋史学者もあり、その方にも若干伝わった本もあるかもしれない。

藤田元春教授は、葬式に参列した話などされ、湖南を「えらいやっちゃ」といわれた。口の悪い藤田教授が「えらいやっちゃ」とほめるのは、限られた少数の人々であった。

両教授の話をきくまで、湖南の名もよく知らなかった私は、ひとつ湖南の学問とは、どういうものか、読んでみようと思った。三高図書館は、当時蔵書数7万5千冊といわれた。

昭和21年に私が本学の教授になった当時の関大の蔵書数が6万6千冊といわれたのに比べると、高等学校ながら、優秀な内容を持っていた。私が図書館で先ず借りて読んだのは『研幾小録』次いで『読史叢録』、第三が『日本文化史研究』であっ

た。いずれも高校1年生にとっては、非常にむづかしかった。『研幾小録』の最初の論文は「尚書稽疑」であるが、その一篇に長い時間をかけて、それでも、よく判らなかつた。ずっと後になって、この論文の骨子が、湖南の尊敬し、賞揚して止まぬ徳川時代の天才的町人学者富永仲基の独創的な史学研究法である「架上説」を応用したものであることを知った。架上説とは、仲基が仏教の諸經典を研究して、時代が降るに従って、より古い時代に年代をかけた伝説を附加することを意味する。

私が高等学校時代に次いで、二度目に湖南の偉さを頭に注入されたのは、昭和24年に本学に史学科が設置され、初代の東洋史の教授に就任された石浜純太郎先生からであった。石浜先生は、湖南に対して尊敬以上に傾倒して居られた。石浜先生が昭和15年に創元選書の1冊として『富永仲基』を著されたのは、よく知られているが、富永の価値に開眼されたのは、湖南の教示によるものであったようである。

なお石浜先生の慈雲尊者に対する敬仰、顯揚も大きかったが、これも湖南の教示によるものであった。

石浜先生は、しばしば湖南を語られた。特に大正13年7月から翌年2月まで湖南、伯健両先生と共にヨーロッパの仏・英・独・伊等の諸国へ旅行し、仏・英等にもたらされた敦煌文書や仏・英・独に将来された敦煌画を見学調査されたことは、その学問に大きな刺激と飛躍を与えたようである。その際、フランスで有名な中央アジア探検家の碩学ポール・ペリオに逢われたが、それとともに石浜先生の東大同期のセルジュ・エリセーエフ

（白系ロシア人・日本文学専攻）に逢って旧交を
温められた。私事ではあるが、私は昭和38年の秋
から翌年3月初までフランス・パリに滞在した際、
石浜先生の縁でエリセーエフ教授に御馳走して頂
いたことは嬉しい記憶である。

なお石浜先生は東大の支那文学科の出身である
が、その指導教授岡田正之博士（『近江奈良朝の漢
文学』の著あり）とは、余りうまが合わなかった
らしく、卒業後、すぐ帰阪し、大正4年西村天因
博士（『日本宋学史』の著あり）の誘いによって在
阪支那学の文人の文会「景社」に入り、ここで先
生の一歩の親友である武内義雄博士（のち東北大
学教授、『老子の研究』などあり）と知己となっ
た。そして大正5年7月16日に「景社」と京都の
文会「麗沢社」との第一回連合会が宇治の花屋敷
で行われ、この際に湖南はじめ狩野直喜、青木正
児、神田喜一郎その他の諸学者と知り会われた。
なお神田喜一郎博士も昭和21～2年頃、関大へ来
講して居られ、教授室でお見かけした。

湖南の史学に入るため、私の高校1年生当時に
読んだ『読史叢録』には、『魏志倭人伝』研究で、
東京の白鳥庫吉博士の邪馬台国九州説に対して、
大和説を唱えた「卑弥呼考」をはじめそれに関連
した「倭面土国」などの論文があって、私の邪馬
台国問題への関心を開いてくれた。後者の論文に
ついては藤田元春教授が講義中に言及されたこと
もあった。

日本史研究に志した私にとって、やはり印象深
いのは『日本文化史研究』である。特に「近畿地
方の神社について」は今日においても生命のある
論文で、私も学生諸君に何度も推奨した。その独
創性は特に渡来人系の神を祭った平野神社と兵主
神社についての解明である。平野神社は今木神、
久度神、古開神、比咩神の四座の神から成るが、

伴信友以来の学者が充分解明できなかった。それ
を湖南は今木は今来、すなわち海外から渡来した
意とする。久度は百済の建国者を『後周書』、『隋
書』、『北史』などに仇台としているそれで、仇台
は、『三国史記』に百済の建国者とする温祚王であ
り、その数代の後の王に貴須王、また仇首王とい
う王がある。この仇首が^{シニニウ}（シンニウ）をつけ
られて仇道となり、仇道が久度となったと考証さ
れるのである。全く喰りたくなる鮮やかさである。

次に古開は、温祚王の兄に沸流王がある。高句
麗の建国者は沸流王説と東明王（朱蒙説）と二説
ある。高句麗と百済も共に扶余国系の民族で共通
の始祖説話をもつが、百済は東明王の名の朱蒙を
鄒牟ともいい、百済では「都慕」と音通する。扶
余国の古代の王に「解夫婁」があり、解は「大き
な」の意、「夫婁」「沸流」「ふる」は「日」→天照
大神の別名大日靈貴（おむひるめむち）の「ひる」
と同義。そして「開」は「関」（せき）の誤で、百
済の古代の王「肖古」王の「しょうこ」また「速
古」王（そくこ）と呼ばれる。関の音は「そこ」
であるとする。即「ふるせき」である。

更に「兵主」は『史記封禪書』に秦始皇帝の山
東行幸の時、同地の神に、天主、地主、兵主、陰
主、陽主、月主、日主、四時主の八神がある。そ
の兵主が渡来人によりもたらされた。兵主と密接
な地名大和穴師（あなし）は、渡来系の大氏族秦
氏の首長弓月君の名の弓月嵩という山が穴師兵主
神社の傍にある。渡来系の大氏族の漢「あや」氏
は、綾である。漢＝綾＝穴と通ずるとする。この
考証は従来の難解として、解しあぐんだ難問を解
決したもので、日本、朝鮮、中国の歴史に通じな
ければ、かかる解釈は生れない。湖南史学の日本
史関係には、他にも、触れたい高説が多いが、別
の機会をまつ。

五世紀研究の一視点—畿内と日向と吉備と—

網 干 善 教

(一)

日本における古代国家の形成過程をどのように考えるかという課題は、多くの考古学、古代史学徒によって試みられているが、その理解にはかなり開きがある。考古学徒による「むら」から「くに」へという概念の「くに」にあたるものが果して古代国家を意識しているのかどうかという疑問もあるが、弥生社会の発展のなかに古代国家の形成過程を考えようと意図するならば、実年代では紀元前三世紀から三世紀頃となるだろう。

邪馬台国論争における「国」をどのように理解するかということも問題であって、これを「国」と是認するならば三世紀ということになる。

古墳発生の要因を古代国家の形成とのかかわりで考えるとすれば、それは四世紀代になるだろうし、七世紀中葉の大化改新をもって国家の形成とみる考え方もある。

また「くに」と表現する意識のなかには「古代国家」という概念と異ったニュアンスをもたせようとする意図もないではない。「統一国家」とか「大和朝廷」という言葉も実に曖昧な概念であって、実態の明確性を欠く。ところでここで考えようとするのは、そうした曖昧なことではなく、考古学的検証に基づく確かな事実の指摘であって、これによって畿内大王家の勢力が各地に及んでいった実像を証明しようとする意図で、実年代は五世紀前半から中葉と考えてよいだろう。それが「古代国家の形成」とか「大和朝廷による統一国家の形成過程」といった表現で捉えられてもよいであろうし、「畿内大王による国家の形成」という表現でもよい。要するところ、五世紀前半から中葉、すなわち考古学の時代区分でいう「古墳時代中期」の実態が理解されればよいのである。

(二)

最近『関西大学考古学等資料室第2号』（昭和60年3月15日付）に前方後円墳の築造からみた畿内と日向の関係を書いた。要旨は五世紀前半に築造されたと考えてよい日本古墳のなかで最も巨大な

墳丘であるといわれる大阪府の応神陵と日向最大の古墳である宮崎県西都原古墳の男狭穂塚の墳丘を比較すると男狭穂塚は応神陵の二分の一の企画で築造されている。また男狭穂塚と並ぶ女狭穂塚が百舌鳥古墳群中の履中陵の二分の一で築造されていること、さらに女狭穂塚の周濠の規模が応神陵の墳丘の二分の一であること、女狭穂塚の墳丘が応神陵の墳丘の二重目の規模の二分の一であることなど畿内大王陵と推定される応神陵、履中陵と古代日向の代表的な前方後円墳である男狭穂塚、女狭穂塚の間に偶然の一致とは考えられない密接な関係のあることを指摘した。その関係を文献に求めるならば、『古事記』や『日本書紀』に景行・応神・仁徳天皇などの皇妃に日向出身者がいることと考え合せると、それらの古墳が築造された五世紀代に畿内と日向が特別な関係にあったことを示す証拠とたるとであろうという推定である。

すなわち、日向に於いて大規模な前方後円墳を築造することの出来得た首長層は畿内大王陵の二分の一の規模で築造することが出来たのである。翻って考えると日向が政治的に畿内王権のなかに組入れられていたことを示す有力な根拠とみることができると思う。さらに記紀の景行天皇の条に記載されている熊本県の一部である「球磨」や鹿児島県の一部である「贈喉」など畿内政権が南九州地域を遠征したとき、日向がその拠点となっていることも重要な意味を示唆するものと考えた。

(三)

古代吉備国すなわち岡山県にも大規模古墳が多い。なかでも造山古墳、作山古墳、両宮山古墳は著名であるが、吉備最大規模の造山古墳と履中陵、作山古墳と大和コナベ古墳、両宮山古墳と和泉土師古墳、御廟山古墳の相関関係が指摘されてきた。こうした経過にふまえて、最近上田宏範氏が「前方後円墳における築造企画の展開（そのⅢ）」と題する論考を『橿原考古学研究所論集第六』（昭和59年12月20日付）に発表された。それによると造山

古墳と履中陵とは同一の規模である。(ちなみに造山古墳は応神陵の墳丘の二重目と同じ規模となる) 作山古墳は河内仲津姫陵と同一の規模、両宮山古墳は和泉御廟山古墳と同一規模となる。

ところで古墳編年からみると造山古墳→作山古墳→両宮山古墳ということになり、畿内大王陵においては履中陵→仲津姫陵→御廟山古墳ということになる。これを日向の例でみると応神陵(1/2)=男狭穂塚、履中陵(1/2)=女狭穂塚となり、応神陵墳丘二重目(1/2)=女狭穂塚ということになってくる。上田氏の形式分類によると応神陵、允恭陵、継体陵、津堂城山、大和の室大墓、コナベ古墳、丹波の雲部車塚などが「B型式I」であるとされ、これを認めるならば大和、河内、和泉、摂津などの大規模古墳は同一企画で築造されているということになる。

作山古墳は履中陵、黒媛山古墳などと共に「C型式」とされるから、日向では履中陵の1/2と同じである女狭穂塚も同様という結論になる。また、両宮山古墳は「D型式」で土師古墳、御廟山古墳、河内白鳥陵、泉南の宇度塚、継体陵といわれる摂津今城塚、大和の大塚山、中良塚、市尾墓山古墳などがこの型式にふくまれる。ということになる。

そこで古墳築造の背景となった畿内と吉備との関係には周知の如く、応神天皇と吉備臣の祖御友別の妹である兄媛や『古事記』に記載される仁徳天皇と吉備海部直の娘である黒日売との関係などが知られ、畿内大王と吉備の豪族が婚姻を結んでいた伝承がある。反面星川皇子にみられるように吉備の反乱も語られているが、それも結局は畿内政権とのかかわりを示唆していると考えてよい。

(四)

古墳を築造する場合、その企画に一定の相関があるということは、背後に両者の間に密接な関係があったことを示すものと理解できよう。昭和50年5月女狭穂塚が盗掘の被害にあった時採集された埴輪片(277点)の資料が『宮内庁書陵部紀要第



吉備最大の造山古墳

36号』(昭和60年2月28日付)に報告された。それをみると例えば「草摺形埴輪片」などは室大墓で出土した同種の埴輪と同形式であることも知られる。

考古学の長年にわたる古墳編年の成果からみれば、畿内の応神、履中陵や仲津媛陵、吉備の造山古墳、作山古墳、日向の男狭穂塚、女狭穂塚は五世紀前半前後に築造された古墳と考えてほぼ間違いない。そうすると五世紀前半頃に吉備、日向が畿内大王権と密接な関係をもっていたことを実証する資料となる。皇妃に関する文献の記載はそのことを物語っている。

古墳の形式と規模の比較という方法によって、吉備や日向以外の地、すなわち筑紫、出雲、美濃、毛野など地域の古墳と畿内大王陵との関係はどうかという課題がある。こうした研究の方向もまた五世紀研究の一つの視点となるであろうと思う。

木村健助先生とエジプト

加 藤 一 朗

本学法学部名誉教授であられた故木村健助先生が、学問的に人間的にいかにもすぐれた方であったかは、誰しもが知るところであるし、公的に私的に御指導をうけた人びとの思い出は『木村健助先生の追憶』(1980年、関西大学法学会刊行)のなかにつくされているので、そのことについてここで改めて喋^{ちやうちやう}々するつもりは毛頭ない。にもかかわらず、筆者としてはどうしても一言つけ加えておきたいことがある。それは、先生が後輩をはげましてその学究心をかりたてる愛情とお力の持ち主であられたことである。そして筆者もそのような恩顧をこうむった一人である。所属学部は異っていたが、先生も筆者も阪急京都線沿線の居住者であり、ともに「乙訓会」(京都府下旧乙訓郡在住関大教員の親睦^{しんぼく}会)のメンバーであったので、早くから知遇をうることができた。先生の御勉強のきまげとなつてはいけないと思い、御自宅を訪ねる

ということとはしなかったが、時たま通勤電車内で御一緒したとき、無骨な筆者が端麗な先生の横に座らせていただき、何くれとやさしいはげましのお言葉をいただいたことは、当時の筆者にとって無上のよこびであった。騒音のなかで、先生の含蓄深い一言一言を聞きもらすまいと全神経を耳に集中したことであった。

そのようなある日、先生はむかし(大正15年～昭和2年)のヨーロッパ留学の思い出を語られた。そして筆者がエジプト学者の卵であることを御存じであられた先生は「往路エジプトに立寄り、カイロ博物館とギゼー(ギザ)のピラミッドを見学しましたよ」といわれた。この点については一寸説明しておいた方がよいかも知れない。当時日本から欧州への交通機関はいうまでもなく船であった。そして留学生の多くは、スエズで一旦船をおり、その船がスエズ運河を通過するあいだにタクシーをとばしてエジプトに入り、いそいでカイロとその近郊を見物したのち、アレクサンドリアかポートサイドで再び同じ船にのりこんだらしいのである。筆者の知っている先覚のなかにもそのようなコースをとられた方が少なくない。先生もそのなかの一人であったわけである。さて、つづいて発せられた先生のお言葉は筆者の胸に深くつきささった。先生はいわれた、「ピラミッドにももちろん感銘をうけましたがねえ、カイロ博物館で古代エジプト文化に接したときの感激はまったく大へんなものでしたねえ。そののちヨーロッパのどんな博物館を訪れたときも、あれほどの感激をうけることはありませんでした」と。筆者はこのお言葉をうかがったときほど、エジプト学をやってよかったと思ったことはない。

先生の御好意はお言葉だけにとどまらなかった。ともに学内にあった日、先生は筆者の研究室に電話されて、再度「図書館内で会いたい」と呼び出された。おそろおそろ参上すると、初めのときは、「ピラミッド付近で入手したのですが、私がつもっていてもいたしかたないので、あなたにあげましょう。勉強のたしにして下さい」と3個の



A 表 (現寸大)

B 裏 (現寸大)

人形（写真A、B、C）を差出された。あまりの御好意にあっけにとられてしまったが、厚かましくも結局頂戴してしまっただけで、（実はそれ以来ずっと私すべきでないと考えていたので、本稿を記するに際して、これら3点を、考古学等資料室に寄贈させていただくことにした。）3点とも本来墓から出土したものであることはまちがいない。エジプトでは副葬品のなかに人形類のふくまれていることは先史時代以来続いていたことである。それゆえ材質も種々で、副葬の目的も多様であった。日本の埴輪のように殉死者の代りをつとめさせられたものもあったようであるが、いずれにしても、それらのすべてについて本小稿で総括的に説明することは不可能である。話をこれら3点にしぼる。AとBとは典型的な「ウシャブティ」人形であって、この2点はともに薄いブルーのファイヤンス製である。ファイヤンスとは石英質の岩粉に釉薬をまぜて焼いた、エジプトで発達した材質である。おもに新王国から末期王朝にかけて作られたもので、各人形は両手に鉤をもっている。「ウシャブティ」とは「答える人」といういみで、副葬の意図は「来世において墓主（死者）の代りに労働をうけもち、監督者が毎朝仕事始めの点呼をするとき、墓主の名がよばれると、代りに答えて、一日の仕事に従事する」というものであった。大型のものには墓主名とならんで、このようないみの文章が書き連ねられているものもあるが、小型のものは墓主の名前を主とした小数の文字が記され、無文字のものも少なくない。Aの前面（表）下部には縦書にセヘズ・オシリスと刻まれている。この2語はウシャブティにしばしば記されているもので、「セヘズ」とは「輝やかせるもの、明らかにするもの」といういみであるが、実際それが何をいおうとしているのかについては未だ定説がない。「オシリス」については阡陵No.4所載の拙稿「オシリス神小像」を参照されたいが、要するにこのウシャブティの所有者である墓主がすでにオシリス神に化していることを示しており、そのことはつけひげの下端が上にそりかえっていること（神性の象徴）からも明らかである。



B（高さ5.4cm）

かである。背面（裏）にも縦書に文字が刻まれている、下端の文字が人間の座像であることは、その上の数文字が人名（墓主名）であることの証拠であるが、人名の部分は彫りが不完全であるのと、塩分がふきでていることのため、不分明である。Bは文字をともなっていない。極小なかわいらしいもので、あごひげもついていない。Cはやや前かがみになり、胸のふくらんだ木製の女性像で、腕をつなぎとめていた釘の穴とおもわれる小孔がついているが、腕そのものは失われている。足部の裏ににかわ状のものがついていて、どのようなものに付属していたか、また本像副葬の意図がなんであったか、ともに未詳である。



C（高さ18.4cm）

先生に図書館内で二度目にお目にかかったときは、あるフランス発行誌の“Le Nil”（ナイル川）という特集号のシリーズ（3冊）を下さった。たまたまアスワン・ハイダム建設直前のことで、この建設のために水没の危機にさらされていた諸遺跡救済のためのキャンペーンがユネスコによって世界的に大々的にくりひろげられていて、これらの刊行物もそのような主旨ののりであった。それらはナイル河畔の風物と遺跡の大型なカラー写真で一杯であった。筆者は再び感謝と感激にひたったことであった。

あこのころ、わが国もヌビア（ナイル川中流）に考古調査発掘隊を送る計画をたてていた。しかしエジプト政府の反応は冷たく、「資金援助をのぞむが、調査隊派遣はのぞまない」というものであった。すでに世界的レベルに達し、あるいはそれを超えていたわが国の考古学の技術が未だエジプト政府には認められなかったのである。そして現在、早稲田大学がエジプトのテーベとフッサートで10年以上にわたって発掘調査をつづけており、京都の平安博物館もアコリスに年々（本年は第5次）発掘隊を送っていることを想い合わせると今昔の感にたえない。

内藤湖南と内藤伯健の書 —内藤文庫特別展観から—

奥村郁三

内藤湖南書「少見多怪」

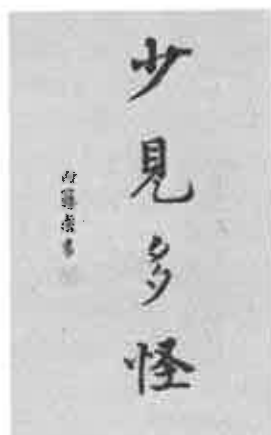
この四字はもともと「牟子」（後漢・牟融の撰。隋書經籍志は儒家に、旧唐書經籍志、新唐書藝文志は道家に入れる）の語で「見る所少なく、怪しむ所多し。らくだを見て馬の背中に腫れるものがあるという」といっている。知ることの少ない人は間違っただけをいうものだ、ということで痛烈な揶揄ととれる。湖南は「多怪」どころか「見る所少なく」しかも「断ずる（偏見と独断）所が多い」学人がいると手きびしい。

湖南の書は多言を要しないが、学者また書人であり、書人また学者であった時代（このような時代はほぼ明治で終りを告げる）の中でも名筆の一人である。その方向は北碑を好まず、ひたすら南朝から隋唐の書を追究した。これは湖南の学問からくるのであって、中国全文化史における南朝文化の位置に対する評価と、書の発達の歴史を通じて、正統は王羲之・王献之を頂点とする書法にある、とすることからくる。湖南の書はこの書法の

研究の実践であった。唐代の製法を模して作られた雀頭筆を中国へ持参し、羅振玉に書かせてみた、などはいささかした書法の分析的研究の挿話である。事実晩年の傑作「諸臨蘭亭序跋」は雀頭筆で書いている。硯などを集める興味はなかった。伯健によると京都時代から特にすぐれているが、

少見多怪（湖南書）

書は天性うまい。天性の芸術的感覚が現れるので、そう苦労しなくてもうまい字が書ける何かがあるという。掲出の「少見多怪」はわずかに四字であるが、豎法や見の字にみえる勾法など、特に智水の影響を思わせるものがあり、上のような湖南の書の特徴がよく示されている。湖南の書は二王に典型を求めながら独自の境地を開いた書である。



昭和2年新築当時の恭仁山荘（内藤文庫より）

内藤伯健書「宇治橋擬宝珠銘」拓本

この拓本は京都府宇治市、宇治橋の擬宝珠の新銘で、昭和二十六年（一九五一）の作。撰文は吉川幸次郎博士、彫金は大久保鼎湖氏である。昭和の金石として屈指のものとなろう。文の内容は宇治川の情景に歴史を盛り込み、あたかも対日平和条約の年にあたり、美はしい山河を後世に残したいと感慨をこめている。銘の通例で一句置きに韻を踏んだ美文（文は吉川博士の全集に収録）。宇治橋には同時に作られた橋川時雄博士の撰ならびに書の擬宝珠銘がある。すぐれた三人の中国学者と一人の彫金家の鑲骨の作である。書は直接書丹された。

伯健の書は湖南に似ていることは一見してわかる。それは両先生の用筆法が南朝で正統とされた指掌法にあることが原因の第一で独得の丸味を帯びるのはそこからくる。智永を習いこんだのもそ

うである。書を学究の対象としたことは徹底しており、例えば敦煌法律文書にある形態からだけでは判断のつかぬ難読の草体字などを、当時の筆法から帰納（して断案）を下しているなど、書法の精通を直接活用している好例である。正倉院文書の研究（神田喜一郎博士らと正倉院倉内で調査）でも同様であるが、いずれも書法の徹底的分析と実際に筆で試してみないとわからない結果である。

晩年の書は湖南と区別がつかないものがあるが、両者をよく比較してみると、同じく南朝風の洗練さがあるが湖南の書はその中にも剛気があり、伯健の書はより理詰めで精緻な洗練美を求めている風がある。いずれにせよ指掌法を追究した書で強いていえば学風の違いという他ない。



宇治橋擬宝珠銘（伯健書）

50年ぶりの恭仁山荘

小 野 勝 年

湖南先生の龐大な蔵書と隠栖終焉の恭仁山荘が創立100周年記念事業の一環として関西大学に引き受けられたことは慶賀せずにはおられない。中央グラウンドの敷地半分を割愛して建てられた美しく、かつ堂々たる図書館を仰ぐにつけ、あの蔵書の整理が一日も早く完了して、公開されるのを待望する一人である。

かねて山荘の消息について、風聞はあったものの、むしろ全く途絶えてしまっていたといったほうが適切であった。あれからもう50年が過ぎて、去る4月19日、誘いを受けるままに2度目の訪れの機会を持ったのである。

最初の訪問は大学卒業の直後で、先生がなお、かくしゃくとしていたときであって、その印象は今も強く残り、自分にとっては恰も一期一会の思い出につながる。そのことについてはかつて雑誌『書論』に「湖南先生の思い出」として触れたこともある。かえりみて、2度目の訪問はなつかしさの一面、気の重い面もないではなかったが、切角の誘いであってみれば、無下におこわりする訳にもいかなかった。といって応ずる以上は、前以って何か知っておきたかったので、前夜に奥村郁三教授のお宅に電話をかけた。教授は内藤文庫を迎えるに当って非常な尽力をされた方であり、湖南の長男故伯健教授の愛弟子でもある。迂闊であったが、先生に9人もの子女があったことを初めて知った次第であり、兼ねて伯健教授の外に三男の戊申君など、多少付き合っていたものの、

その四男の方が山荘を守られている由もまた初耳であった。

一夜漬けでは『湖南全集』(全14巻)を繙くといった余裕もない。幸いにも手元に畏友三田村泰助君から恵贈された『内藤湖南』(中公新書)があったので、これを開いてみた。この書は先生の若い時代に重点が置かれているものの、先生が発掘され、中国古代史研究に適用された富永仲基の「出定後語」のことはじめ、多彩な学問遍歴を要領よくまとめている。そのうちでも改めて感動を覚えたのは、京大退官直前の西欧旅行についてであった。外遊7ヶ月、一行は先生と伯健氏、それに関大と関係の深い石浜純太郎先生の3名で、主目的はペリオおよびスタイン収集の敦煌文書の調査であったが、このような学術調査にとどまらず、英、仏、伊、独、奥を巡り、名ある美術館や博物館をほとんど見学し、あるいはダヴィンチ、ロダン、ルノアールなどの絵画彫刻、さらにオペラや音楽の演奏なども広く聞いたりした。かくて得たところは、西洋文化に対する中国文化の先進性と高級さの再認識であったという。

「真の文化とは個性の形式であり、生活の芸術化である。人類は最初、原始生活から出発し、文明の進歩に従って天然を征服するが、それが最後の到達点ではない。さらに天然を醇化、すなわち天然を保護し、育成して、天然の中に安んじ得る程度になるところに真の文化生活が存する」といった結論であった。この文章は改めてわたしを強く捉えずにはおかなかった。それは先生が山荘に隠栖されたことと結びつくが、今年の3月に奈良県が開催した第1回国際シンポジウムのテーマ「文化遺産と都市づくりの調和」の課題にも関連を持ち、すでに60~70年も以前にこうしたことがらについて喝破しておられるからである。シンポジウムでは奈良に住む一人として、春日山原始林と公園と社寺と売店、あるいは群鹿と遊覧者といった係り合いに対する思いが致されたが、この機に、裏側から眺めた春日山はどのようなかといった着想が脳裏に浮んだ。山荘の庭から、否部屋においても、朝夕眺望できる対象であるからである。



恭仁山荘書庫と雪見灯籠

雲一つない素晴らしい午後であった。考古学等資料室の角田芳昭君とつれだって加茂駅から南の方瓶原^{みかのはら}に向った。ほぼ2キロ木津川の架橋を過ぎ、目指す山荘は茶畑の手前、小高い山腹に位置していた。山裾一帯は茶畑であったが、山荘の一部はこんもりした樹林に蔽れ、遠くからは氏神の社祠のように見えた。緑色のフェンスに囲まれていたが、これはすでに関大当局の手によると思われ、丁度入口にトラックが停めてあって、3人の工事関係者が仕事の準備中であった。

入口の脇に当って、二階建ての離れがあり、主屋は突当りに玄関、一方に通用口を設けていたが、いずれも閉されたままであった。主屋は入母屋で二階と平屋からなっている。その南側の雨戸は閉ざされ、外観はかなり荒れていた。奥まったところに白亜塗りの書庫があり、記憶では、屋敷から廊下伝いで行くようになっていたが、今は独立し、最近塗換えられていて、真新しくなり鉄の扉には鎖錠がかけられていた。書物は全部大学へ運ばれ、内部は空室だとのことである。

数個の庭石が散在し、石灯籠の外は、石径も草に埋れて、注意しないと気付かない程であった。アセビやサルスベリ、それに2〜3本椿も生い、葉蔭から深紅と純白の花が数輪のぞいていた。斜面の樹木は茂り、楓など一抱え以上の太さとなり、その間に2〜3本、枝垂れ桜が咲き、薄桃色の小さい花卉がたわわについていた。花の簡素さが却ってありし風情をさそうに足りた。樹木の隙間からすかしてみると、空闊の彼方に春日山が望めたが、折悪しく霨が覆うていたために、輪郭を残すのみで、残念にも南面からの春日原始林の眺望といった着想は果し得なかった。

辞去にあたり、裏手に廻ると、たまたま離れの戸が開いていた。ためらったものの、中に入ると、奥の壁際に棚が作ってあり、上に先生の写真が飾られていた。ソフト帽をかぶった晩年の遺影で、如何にも温容ゆたかで、こちらが年老いた目で見ると、実に若々しく写された湖南先生だった。三田村君は著書の末尾に「時局の進展は湖南を絶望せしめ、側近にもらしたことから心中深く日本の破局を予測したふしがある」と述べている。しかし、一代の学匠の慧眼も、将に50年を経て万巻の書と山荘とが併せて関西大学の所管に帰し、そこに永遠の安住を得るにいたったことは予想だ



晩年の湖南先生

にせられなかったであろう。史的因縁のあるところ欣快に堪えないことは繰返すまでもない。それと共に一面これを継承した学生諸君に待望される活用の責任の重さのことも素通りにはしがたい。

清浄な空気を浴び、存分に吸って、明るい気持で山荘をあとにすることになったが、暮れるにはまだ間があったので、揃って周辺の鑄銭司^{かいじゆうし}址や恭仁京^{きょうじん}の遺跡を巡り、また海住山寺^{かいじゆうせんじ}にも詣うでようということになった。海住山寺の十一面観音像は奈良国立博物館に常陳され、平安初期の檀造様式の傑作として広く知られているし、しかも両3年前には同時の特別展観が開催され、室町時代の浄土変相や元時代の龍泉窯の花瓶など公開されたりして印象も新たである。参拝のことを常々懸案としながらも、不精にもこの日まで遂に機会を持たなかった。計らずも山荘訪問にあやかって、ようやくその念願が果せたのである。幾度か蛇行する急な坂道を登りつめたあたり、山の端に朱塗の小さな山門が建ち、更に離れたところに本堂^{しょうどう}があって、その右手に瀟洒な五重塔が建っていた。鎌倉時代の国宝建築として著名な一基である。庫裏を2・3度おとったものの折悪しく、住職は不在であった。奥はユースホステルに開放されている。その後鑄銭司、恭仁京址を見学した。恭仁京はかつて訪れたことがあり、そして今度は花崗岩の豪宕な礎石の手前で偶然一片の古瓦を拾ったりした。この秘められたロマンの発掘は他日を期したい。(辛丑四月廿三日)

内藤湖南と「恭仁山莊」

角 田 芳 昭

関西大学創立100周年記念事業の一環として、東洋学の泰斗内藤虎次郎（湖南）博士及び乾吉（伯健）先生旧蔵書籍類約3万冊と湖南博士が京都帝大を退官後晩年を過された「恭仁山莊」（京都府相楽郡加茂町瓶原）とを本学が譲り受けることになった。

寄贈の経過については『関西大学通信』131号（昭和58年10月16日号）に「内藤文庫」を迎えるにあたってと題し奥村郁三（法学部）教授が詳細に書かれている。これによると奥村教授の恩師が内藤伯健先生であった関係と、内藤家ご遺族のご理解と、神田喜一郎博士（湖南博士高弟）のご厚情などがあり本学に架蔵されることとなった。

蔵書は主に漢籍が中心であるが、書画類、金石文拓本類、殷代甲骨、唐代画像博など、中国古代資料も含まれている。これらの資料と同時に湖南が晩年を過した「恭仁山莊」も譲り受けることとなった。

内藤湖南（1866～1934）については学生時代に『支那絵画史』を読み、その中の論文『南画小論』『本邦南画の鑑賞について』を卒業論文に引用したため多少の知識があった。そこでこれを機会に湖南の人とその別荘「恭仁山莊」について調べてみたい思いにかられた。

『書論』13号（1978年秋号）は内藤湖南特集号である。ここには神田喜一郎、吉川幸次郎、日比野丈夫、宮崎市定、三田村泰助、田村実造、小野勝年先生など諸学者が湖南についての思い出を綴られている。この書に三田村泰助先生が「徳富蘇峰と恭仁山莊文庫」と題して執筆されており、湖南晩年の様子と山莊の模様が知れる。

これによると昭和4年4月19日徳富蘇峰翁が「恭仁山莊」を訪問している。そこで徳富蘇峰が訪問した4月19日筆者も訪れ、この目で恭仁山莊

を見、周辺遺跡を訪ねたいと思った。幸い小野勝年先生（関西大学・龍谷大学講師）が同行して下さることとなった。小野先生は湖南最晩期の講義を京都大学で受けられた方であり、また筆者の20数年来の恩師でもあるので特別にお願いし、ご指導を賜わることにした。先生も昭和8年春卒業時に訪れたのみで50数年ぶりの訪問とか。

昭和4年4月下旬の東京日々新聞に「上方の春色」（恭仁山莊）と題する一文を蘇峰が書いている。

「四月十九日、昨日と打って換りたる好天気、午前八時半電車にて奈良に赴く。奈良見物のためではない。木津川畔なる恭仁山莊の内藤湖南翁を訪ねんが為に、而して併せて其の珍書奇籍に見参せんが為に。（中略）此辺聖武天皇の御守、奈良より一時都を移し給ひし恭仁の故都趾にて、その道傍には、今尚を国分寺の伽藍の礎石が歴々として存している。我等は車を下りて、湖南翁の恭仁山莊に向った。田の中の一本道、道の両側には亭々たる櫟が相並んで列をなしている。晩秋初冬の候は、正しく雲林画中の趣があるであろう。予は櫟や檜の秋葉には偏愛がある。道傍に蒲公英や堇がおのがまにまに咲き乱れている。特に堇の色の濃かなる、我をして覚え、其の幾片を摘み取ることを禁ずる能はざらしめた。而して山腹には、七八の人家がある。其の中に書庫らしき白塗の土蔵と一軒の蘆酒たる板屋とが間わずして湖南翁の恭仁山莊たるを知った」

このような書き出しであり、さすが当代随一の文筆家を思わせるもので、簡潔にして実景を描写している。この時蘇峰を案内して山莊に向ったのが岩井武俊（号雍南）氏であった。岩井氏は内藤湖南の紹介で大阪毎日新聞社へ入社し、後年考古学・歴史学方面の記事に特異な才能を発揮された人である。大正6年10月15日の毎日新聞記事にお



恭仁山莊全景（京都府相楽郡加茂町所在）



書斎における湖南（昭和4年頃）
（内藤湖南全集第11巻より）

いて、河内国府遺跡『第4回発掘調査(一)世界的大遺跡の発掘』と題し岩井雍南の筆名で発表している。雍南の号も湖南の命名になるという。以降連続して17回国府遺跡の発掘を報じ、考古学発掘を学問として報道した巧績は大なるものであった。ちなみにこれは毎日新聞社長本山彦一氏が発掘されたものであり、この多量の資料が関西大学へ寄贈され、現在整理中である。何か因縁めいた想いすら感じる。

内藤湖南（1866～1934）は慶応2年（1866）7月秋田県鹿角市十和田町毛馬内に生まれ、明治18年秋田師範学校を卒業した。明治20年上京し「明教新誌」「日本人」「万朝報」に筆をとり文名が広く知られるようになった。その後「台湾日報」に招かれ、そして「大阪朝日新聞」に入社し縦横に健筆をふるった。

明治40年10月京都帝国大学へ招かれ東洋史学の講座を担当した。42年教授となり、翌年文学博士の学位を授けられ、支那学の権威として重きをなした。大正15年8月停年退官した。多量の珍書奇籍を収集し、蔵書五万冊に及んだ。また名筆家でもあった。昭和2年8月京都府相楽郡加茂町瓶原に新居を営み「恭仁山荘」と名付け隠棲した。同9年6月26日山荘にて逝去、享年69才であった。

さて、湖南が新居とした「恭仁山荘」は国鉄関西線加茂駅北方2キロの山腹にある。この地は瓶原みかのはらといって百人一首藤原兼輔の「みかの原わきて流るる泉河、いつみきとてか恋しかるらん」で知られる山紫水明の地である。

奈良時代に斐原離宮、岡田離宮が置かれ、藤原広嗣の乱直後の天平12年（740）12月聖武天皇が平城京からこの地に遷都され大養徳恭仁宮とされた。以後3年余の都となったが、宮都の完成がないまま難波京へと移された。その他この周辺には鋤銭址、国分寺、海住山寺など著名な史跡が多い。

蘇峰の記す如く董すめい、蒲公英たんぽぽの乱れ咲く中を恭仁橋をわたり山荘へと着く。土蔵・母屋・離れがあり、60年の歳月に建物も荒廃している。しかし往

時をしるばるに足れる堂々たる風格がにじみ出ている。この山荘も岩井雍南の斡旋により決定したものとわれ、大正12年12月20日登記を済まし、翌13年4月頃より仕事にかかっており、遅くとも14～15年中には完成をみたことであろう。（中西彦治宛書簡）。また建築資材に亡父の遺見といって、杉材等をくれるよう故郷へ無心をいつている。そして新築なった山荘へ昭和2年8月より移り住んだ。そして翌年2月落成式を行なったと考えられる（関内藤文庫に新築記念写真が20数枚存し、3年2月23日写すとあり、神主のお払いを受けている場面が写されている）そしてここへ移り住んで以来、多数の訪問客と歓談し、また自慢の蔵書を見せ喜んでいた。

恭仁山荘は湖南終焉の地であり、各界の名士達が訪れ歓談した由緒ある建物である。現在は荒廃しているが、創建当時の写真も残っているので、復元は可能である。将来の活用方法であるが外観のみを復元し、内部は宿泊ができゼミ等が行なえる施設に改装しては如何だろうか。周辺に遺跡が多いので、第二の飛鳥文化研究所と同様の機能を有する古代学などの研究所を設立したらどうだろうか。幸いこの近隣は京阪奈学術研究都市構想が具体化されているので、この一翼をになう施設としても可能だと考える。また、地元にも湖南顕彰会もあり、町教育委員会の意向なども尊重し、社会教育に寄与したいものである。ともあれ、この山荘が有効に活用され、周辺遺跡の研究と湖南研究が一層盛んとなっていくことを望むものである。



恭仁山荘四宝詩之一 恭仁山荘雜詠
湖南書（書論13号）より

資料紹介「漢代の明器」

本学所蔵考古資料の中に中国の漢・唐代の明器が若干ある。それに加え59年度に「緑釉猪圈」を購入したのでここに紹介してみたい。

明器とは神明の器である。青銅祭器等礼につかう神聖の器はみな明器であったが、のちに凶礼の葬儀につかう副葬品のみが明器、または凶器とよばれるようになった。殷周期には銅器をうつした土製品・鉛製品があるが、戦国時代以前の明器については研究が少なくはっきりとはわからない。戦国時代になると、黒陶俑とよばれる10cmから20cmくらいの土偶が作られ、ほかに動物や鏡・帯鉤・高杯耳杯・鐘などがあり、河南省輝県で多数出土したと伝えられている。漢代になると帝室に明器をつくる東園匠という役所まで設けられた。『後漢書』礼儀志下に大喪に際して副葬すべき明器を詳記している個所がある。「甕三、瓦甕一、矢四、酒壺八、杖几一、瑟六、琴一、干戈各一、瓦甕二、瓦釜二、瓦鼎十二……」など明器のリストが書かれている。家屋・瓦井・畜舎・屋舎・車輿・楽器・壺等の模型があり、生前の全てのものが作られている。人物・動物模型も多い。死後の世界の生活に奉仕する従者として墓室内に納められたものである。このうち特に人像を「俑」とよぶ。漢代の土偶は手づくりのものもと型製のものがあり、製作は一般に粗拙なものが多い。しかし形象明器には釉薬の施されているものもあり、特に緑釉の光沢には素晴らしいものがある。屋舎の類は切妻の本瓦葺のものや、三層、四層の楼閣のものには緑釉が施され、それが銀化してえもいわれぬ鮮やかな美しさを出している。

写真〔1〕は「緑釉猪圈」であり後漢の紀元2世紀頃のものとして推定され、高さは18cmである。周垣は円形で一隅に厠を付設している。四注本瓦葺の屋蓋があり、厠の前に長い壺壇があり、斜面を呈す。全面に緑釉を施し、それが銀化してえもいわれぬ美しさを出している。すなわち、釉面が白くかせところどころ銀虹色の散光を発しており、



〔1〕 緑釉猪圈(高さ18cm)

これは土中で釉表が風化して炭酸アルカリ層を生じ、その皮膜が外光を干渉するために起る現象である。これは緑釉のみに起る現象で、ラスターとよばれる。ローマングラスと比較され尽きない興味にかられる。中央部より端に母豚が寝そべり、子豚5匹が母豚の乳房を吸い飲んでいる。ほほえましい図像である。

豚や羊は粗食にたえ、人間の排出物をも処理してくれるので、飼育小屋は厠に接してつくられた。華北は雨が少なく、土地も乾燥しているので、このような飼育も行なわれた。漢の高祖の妾であった呂太后が、正妻の手足を切って厠におき、豚女と称したのも、こうした猪圈の様式から生まれたものではないかといわれている。同様のものが京都大学陳列館、天理参考館、早稲田大学会津記念室や博物館などに所蔵されており多量に生産されたことを伺わせる。

写真〔2〕は「^{ろくゆうきん}緑釉圀」であり高さ23.9cmである。緑釉が全体に厚くかけられており、緑の光沢が現在に至るも残っている『周禮』考工記に「圀、圖倉」とあり、即ち圀とは圓い倉だといっている。円筒形につくられた穀物倉である。頂部に本瓦葺の屋根があり、中央部に円孔が開いている。器体に細線帯を2ヶ所にめぐらし、底部に熊足三個をつけている。円形の上覆蓋が本来は存していたのであるが、現在はついていない。中国北部では地上、または一部を地下に掘りこんで築かれた洛陽河南県城址の漢代の例では、直径3メートル前後で、埴あるいは土でつくられたものが数基発掘されている。また洛陽金谷園出土の明器には、外側に粟、大麦、白米等の文字のかかれたものがあり、収納されていた穀物がわかる。京都大学陳列館に形態は違うがこれと同様のものがあり、「熹平元年造」と朱色で記名されている。熹平元年はAD172年であり、年代の判明する資料として貴重である。また天理大学参考館目録にも同様のものが収載されている。

写真〔3〕は「灰陶井欄」であり高さ12.5cmで



〔2〕 緑釉圀(高さ23.9cm)



〔3〕 灰陶井欄(高さ12.5cm)

ある。粘土を型にはめ焼き上げており施釉はしていない。四方に牛馬等が画かれており、大きな屋根があったものと推定される。井欄の左右に柱の穴がある。井欄には諸々の形態があり、方形、円形などの上には支柱を樹て、滑車の装置を示している。

漢代には多量に作成され副葬されたと思われ、同様のものが多量に発見されており、博物館や図録に収録されている。生命をつなぐ井戸ということで、全ての墓室に納められたことであろう。

すなわち『淮南子』時則訓『論衡』祭意、『白虎通』には月令五祀に戸、竈、中霤、門、井と書かれ、五行に関連した五祀の思想にもとづいて明器をおさめていたとも考えられる。

唐代になると「白磁」と「青磁」と「三彩」が著しい発展をとげ、明器にも施釉され、唐三彩と呼ばれる(緑・褐・黄)明器が墓中に安置された。俑、瓶、馬、楼閣などに特に傑作が残っている。これらは官窯において皇室、貴族の葬礼用に製作されたものであろう。明器製作の伝統は、その後明清代まで残っているが、宋代以降においては、ただ機械的に、形式的に送られ、それまでの表情のいきいきした、あるいは写実性に富む明器は作成せられなくなり、形骸化したものとなってきている。

〔角田芳昭〕

☆資料利用状況

- 60・5 鉄地金銅荘銀留心葉形杏葉 他10点
名古屋博物館「古墳時代の馬具展」
へ貸出
60. 5 獣面鍔頭大刀柄頭 1点
島根県立八雲立つ風土記の丘「銘文入
大刀の世界—岡田山1号墳出土大刀銘
文表出記念展—」へ貸出

☆受贈資料

60. 5 ウシャプティと副葬人形（エジプト考
古資料） 計3点
加藤一朗先生（文学部教授）より寄贈
される（6ページ参照）

☆購入資料

漢代明器「緑釉猪圈」 1点（14ペー
ジ参照）

関西大学考古学等資料室紀要（昭和59年3月）第

1号目次

序

新宮市神倉神社ゴトビキ岩下出土の銅鐸

徳島県犬伏旧釈迦堂出土瓦経の復原研究(二)

——『仏説観普賢菩薩行法經』について——
漢式鏡の銘文の一二

——日有喜・繁精白・七子九孫銘——

茶あび祝

円山応挙の眼鏡絵と歌川豊春の浮絵について

——舶載版画と浮世絵版画との関連——

関西大学考古学等資料とその恩人たち

シカゴ大学東洋研究所博物館

資料編

関西大学考古学等資料室概要

学芸員資格の取得とその後の進路について

関西大学博物館実習日程（昭和五十八年度）

関西大学考古学研究室開設30周年記念 考古学論
叢——目次

『阡陵』——関西大学博物館学課程創設二十周年
記念特集——目次

『阡陵』（関西大学考古学等資料室彙報）目次

関西大学考古学等資料室規程

考古学等資料室紀要第2号（昭和60年3月）

目次は次号収録

編集後記

本学創立100周年記念事業の一環として、総合図書館内に「内藤文庫」が架蔵されることになった。そこで内藤湖南に関する研究の一端を収載した。横田、奥村、小野先生には特別にお願いし玉稿をいただいた。ここに感謝申し上げます。

湖南晩年の隠棲地「恭仁山荘」が有効に活用されると同時に、湖南研究が進展すれば幸いである。加藤先生より今回エジプト考古資料（第6ページ参照）の寄贈を受けた。改めてここに感謝申し上げます。

本資料室も今年度旧図書館が改装され、移

転することが決定した。来春には新装なった資料室において、充実した展示を行ないたいと考えています。

表紙の写真は、兵庫県川西市加茂遺跡出土の「壺形土器」であり、弥生中期の完形土器である。本学考古学研究室と関西学院大学との合同調査において発掘されたものであり、施文は畿内第Ⅲ様式の櫛描文で口縁部を広くおりまげ、その口縁部を少しもりあげている。また口縁端には3条の凹線文をつけている。高さ36.7cm、口縁部の経21.9cm、胴部の最大径23.7cmで大型の壺であり最も優美な形態である。

〔角田芳昭〕